

富山県 朝日町
竹ノ内Ⅱ遺跡発掘調査報告書

2005年
朝日町教育委員会

富山県 朝日町
竹ノ内Ⅱ遺跡発掘調査報告書

2005年
朝日町教育委員会

序

朝日町には多くの時代に繁栄した様々な遺跡が存在します。

今回発掘調査が行なわれた南保地区『竹ノ内Ⅱ遺跡』は同調査区南側にて平成13年に富山県埋蔵文化財調査事務所により調査が実施され、その出土物から中世の遺跡であることが確認されました。

では、朝日町の中世とはどのような時代だったのでしょうか。近年の発掘調査等の研究においてその面影が徐々に明らかになってきています。

文献においては古くは古代から中世にかけて、皆様にも馴染みの深い「平家物語」や「源平盛衰記」等にも町の歴史を支える人物達が登場します。また、現在でもその名称が残る「大家庄」「佐味庄（現泊地区）」においても古代藤原政権時代の莊園制度の名残が見受けられます。

実際町内の遺跡群からは、古代から平安、戦国時代を駆け抜けた朝日町の素晴らしい歴史を目で見て、肌で感じることができます。多くの寺院や伝承をはじめ、この時代北陸の要塞としての役目を担った『宮崎城址』その一角に佇む『北陸宮墳墓』、今回の調査区に程近い町部に位置し、時期も平安末期との説もある『南保城（館）址』。古来から残る中世の古墓『白ヶ谷古墓』『柳田古墓』。海沿いではこの時期製塙が営まれていたことがわかる『境関跡』『宮崎塙田遺跡』など、当時の生活風景をあらゆる角度から想像させてくれます。

今後調査を進めるにあたり、これらの時代の様々な形式の遺跡は、当時の朝日町が日本の歴史にどのように反映していったのかを解明できる大変興味深い文化財であるということがいえるでしょう。

この報告書が皆様の文化財への興味・関心の向上へのきっかけとなることができれば幸いです。

おわりにこの報告書を発行するにあたりご協力をいただきました地元の方々及び関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

朝日町教育委員会

例　言

- 1 本書は朝日町南保高畠地内に存在する竹ノ内Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は県営農免農道整備事業に先立ち朝日町教育委員会が実施した。
調査費用は富山県が負担した。
- 3 調査事務局は朝日町教育委員会事務局生涯学習・スポーツ係におき、同教育委員会
局長代理水島康彦が調査事務を統括した。また、調査・遺物整理に当たり、朝日町
シルバーハウスセンター及び地元住民の方々の協力を得た。
- 4 調査期間 平成16年8月11日～平成16年10月8日
調査面積 430 m²
- 5 発掘調査担当者は次の通りである。
本調査 平成16年8月11日～平成16年10月8日
担当者 (朝日町文化・体育振興公社) 文化財保護主事 勾坂友秋
文化財保護主事 島 瑞穂
- 6 資料の整理、本書の編集・執筆は、文化財保護主事勾坂友秋・島瑞穂が行なった。
また、調査期間中富山県埋蔵文化財センター斎藤隆氏、富山県教育委員会文化財課
高梨清志氏よりご指導助言をいただいた。記して誠意を表したい。
- 7 本誌の挿図・写真図版の表示は次の通りである。
 - (1) 方位は真北、水平基準は海拔高である。
 - (2) 遺構の表記は次の記号を用いた。溝：SD 穴：SK 不明遺構：SX
 - (3) 挿図の縮尺は等倍・1/2とした。
 - (4) 写真図版の遺物の縮尺は等倍・1/2・1/4とした。
- 8 土色の色名については、1997年後期版「新版 標準土色帖」に準拠した。
- 9 出土品及び、記録資料等は朝日町教育委員会が保管している。

目 次

本文

序

例言

I 位置と環境	… 1	IV まとめ	… 10
II 調査に至る経緯	… 2	報告書抄録	… 17
III 調査の概要	… 3		
1 調査の方法			
2 地形・立地			
3 基本層序			
4 遺構	… 4		
5 遺物	… 5		

挿図・図版

—挿図—

第1図 遺跡の位置と周辺の地形	… 1
第2図 調査区周辺地図	… 2
第3図 調査区拡大図	… 2

—図版—

図版 1	調査区全体図及び遺構断面図	… 6
図版 2	遺物分布図	… 7
図版 3	遺物実測図	… 8
図版 4	遺物実測図	… 9

—写真—

調査区全景	… 11
遺構・遺物出土状況	… 12
遺物写真	… 13 ~ 16

I 位置と環境



第1図 遺跡の位置と周辺の地形 (S = 1/25,000)

遺跡の位置と周辺の地形

第1節 地理的環境

朝日町は富山県の東端、新潟県の県境に位置する。町は大部分が小川扇状地と(2級河川)と黒部川(1級河川)の旧扇状地によって形成されている。

今回の調査地『竹ノ内Ⅱ遺跡』は朝日町南保の高畠地区に所在する。この地区は標高約50mを測り、小川扇状地の末端に隣接する南保山麓複合扇状地(形成期は小川扇状地形成以前か前期と推定)の堆積面に存在する。

現在は、昭和38年当時の大規模な圃場整備により緩やかな傾斜をもつ水田地帯となっている。

第2節 歴史的環境

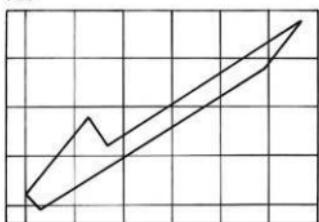
この遺跡周辺には、旧扇状地沿いに主に繩文から中世にかけての遺跡が数多く存在する。繩文においては国史跡「不動堂遺跡(中期)」をはじめ「下山新遺跡(中期)」「柳田遺跡(前期)」等が当時の繁栄を示す。

今回の調査区『竹ノ内Ⅱ遺跡』と同時期と推定される遺跡は『南保城跡』『古館城跡』『高畠城跡』『船ノ城跡』『井口城跡』等の城館跡をはじめ、『天香寺跡(寺院)』や『柳田古墓』などが挙げられる。また海岸沿い宮崎地区には中世から戦国時代にかけて北陸の要塞として重要な役目を果たしていた山城『宮崎城』が存在し、当時の文献『平家物語』等にも同地に居を構える武士の名が語られている。

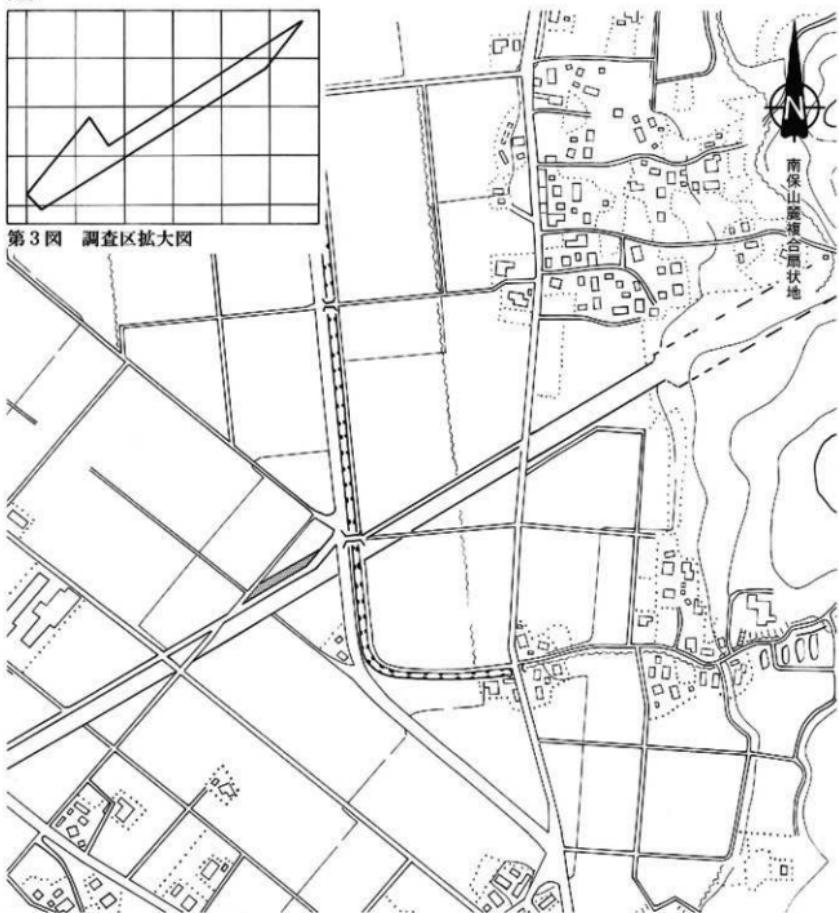
当時は全国に多くの荘園がおかれたことでも知られる。同町西側に隣接する入善町に存在する初期荘園の庄屋跡、国指定史跡『じょうべのま遺跡』をはじめとして、朝日町にも「大家庄」「佐味庄(現泊地区)」など、荘園跡の名残と推定される地名が残る。これらの史跡・文献からも朝日町は中世の時代多くの人が行き交う重要な地域であったことが推測できる。

II 調査に至る経緯

平成 15 年度に富山県魚津農地林務事務所において、北陸新幹線朝日黒部間沿いに新川中部地区の県営農免農道整備事業が実施されることとなった。この農道予定地が埋蔵文化財包蔵地である竹ノ内 II 遺跡の範囲内にあたるため、富山県教育委員会文化財課と協議の結果、平成 13 年度に財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所が調査を行なった北陸新幹線関連遺跡発掘調査と隣接・平行する部分の竹ノ内 II 遺跡・柳田遺跡・下山新遺跡・下山新東遺跡については本調査が必要であると決議した。これにより平成 16 年度 8 月より竹ノ内 II 遺跡地内の道路予定地 435 m² の本調査を行うこととなった。



第3図 調査区拡大図



第2図 竹ノ内 II 遺跡周辺図

III 調査の概要

1 調査の方法

発掘調査は石碑部分の移動が必要であったため、2地区に分け、最初に道路部分を調査し、移動完了後石碑部分の調査を行なった。

バックホウによる表土除去を行い、10mごとの基本杭を設置、その杭に基づき2m×2mのグリッドを設け、それを基準とした。基本杭は国家座標に基づいて基点を設定し、座標軸は南北をX軸・東西をY軸に設定した。

調査は表土除去後人力による掘削作業を行い、遺構・遺物・土層等の確認をし、後日整理作業を行なった。

また、掘削中に圃場整備等で埋め立てられたと推測される礫の中にも石器等の混入が見られたため、調査と平行して洗浄作業を行なった。

2 地形・立地

この調査区朝日町南保高畠地区は、馬鞍山から南に伸びる低山性の中起伏早壯年山地である南保山地を刻む小谷群によって形成された複合扇状地堆積面に存在する。南保山麓複合扇状地の末端は小川扇状地に接しており形成期は小川扇状地形成前かその前期と推定される。(朝日町誌 自然編より)

竹ノ内II遺跡周辺の遺跡の特徴として、北西側には『南保城跡』『古館城跡』、西側には『筋ノ城跡』『井ノ口城跡』等の城跡に加え、『天香寺跡』等の寺院や『柳田古墓』等の中世の遺跡が多数存在することがわかる。

しかし今回の調査区は大規模な圃場整備事業の際包含層の大半が削平されたと考えられ、遺構等は消滅している可能性が極めて高い。

3 基本層序

表土の下は圃場整備の際の盛土と考えられる。この圃場整備により上部の遺構は大半が掘削されたと推定される。表土を含め全体で5層確認された。

海拔は50mから約52mを測り、1層から3層までの深さは約50cmである。3層以下は一部炭が検出されたが、遺物が確認されないため地山とする。調査区西側には川跡と考えられる遺構を確認した。川跡の下層に若干の土坑が確認できたため、生活面に旧河川が氾濫した可能性も考えられる。調査は2箇所に分けて行なったが、基本的には層序は同一としてもよいだろう。

また土層は平成13年度に富山県文化振興財団により調査が実施された竹ノ内II遺跡(当調査区南側)の層序も参考とさせていただいた。

今回の基本層序詳細は下表の通りである。

竹ノ内II遺跡基本層序

土層	種別	色相	土色・土質	深さ
表土	表土	10YR5/2	灰黄褐色土	約15cm
1層	盛土1	10YR5/1	灰黄褐色粘質土	約15cm
	盛土2	2.5Y6/1	黃灰色粘質土	約15cm
2層	中世遺物包含層	10YR4/1	褐灰色粘質土(炭混)	約10cm
3層	地山	10YR4/3	にぶい黄褐色粘質土	

4 遺構

調査では、土坑・溝を確認したが、それらの遺構の年代は出土遺物等から判断し、13～16世紀と考えられる。

西側調査区（道路部分）

Y 60以東では表土下に地山を検出したが、それ以外の箇所は比較的良好な状態で遺物包含層を検出した。

調査では土坑58基・溝8条を検出した。土坑は掘建柱建物の柱穴の可能性もあるが、今回の調査範囲は南北が4mと極端に狭いため、土坑に規則性をみる事はできなかつた。

S D 01

X 52、Y 51で検出し、幅約70cm、深さ約30cmを測る。土師質土器（1～4）・珠洲焼の甕が出土した。

S D 07

幅約1mを測る石積みの溝である。溝の内部から土師質土器・珠洲焼の甕・近世陶磁器・現代の遺物が出土した。この溝の西側約4mまで直径約30cmの石が点在していたが、中世に溝として使われていた可能性がある。中世に使われていた溝が若干の移動を経て、近年まで利用されていたのではないかと推定される。

S D 08

調査区西側で検出した自然流路である。幅約3m、深さ約60cmを測る。覆土には直径30cm前後の石も多数含むため、急流であったと考えられる。また、覆土は単一層のため、洪水等により一時期に埋まったと考えられる。

S K 04

X 53、Y 52に位置し、直径約70cm、深さ約20cmを測る円形の土坑である。珠洲焼の甕（18・19）がまとめて出土した。

S K 12

X 51、Y 52に位置し、幅約9m、深さ約40cmを測る円形の土坑である。珠洲焼の甕・擂鉢（20）が出土した。

S K 39

X 54、Y 55に位置する直径約3m、深さ約50cmを測る円形の土坑である。土師質土器（5）・青磁・珠洲焼の甕・擂鉢が出土した。

S K 53

S D 02内のX 52、Y 51に位置する直径約40cm、深さ約30cmを測る土坑である。土師質土器・珠洲焼の甕（21・22）が出土した。

S K 56・S K 57

X 48、Y 48付近に位置する円形の土坑である。S K 56から土師質土器・土錐（15）・青磁・珠洲焼の壺・甕・擂鉢（23～27）、S K 57から土師質土器（6）が出土した。

東側調査区（石碑部分）

搅乱を受け、遺物包含層は削平され消滅していた。遺構は直径約20cmを測る土坑2基のみである。なお、図面は省略する。

5 遺物

調査で出土した遺物は、土師質土器・土錘・青磁・珠洲焼など 13 ~ 16 世紀のものと考えられる。遺物整理箱 (37 cm × 60 cm) で総数 20 箱出土した。

(1) 土師質土器 (図版 3 1 ~ 14)

非口クロ成形の土師質土器である。口径 8 ~ 12 cm を測り、8 ~ 9 cm のものが多い。

S K 01 出土

1 は丸底の土師質土器である。底部から体部にかけて内彎し、口縁端部を丸くおさめる。2 ~ 4 は平底の土師質土器である。底部から体部にかけて屈曲する。

S K 39 出土

5 は丸底の土師質土器である。口縁端部を丸くおさめる。

S K 57 出土

6 は丸底の土師質土器である。口縁端部を面取りする。

包含層出土

7 ~ 9 は丸底の土師質土器、10 ~ 14 は平底の土師質土器である。

(2) 土錘 (図版 3 15)

S K 56 から出土した。長さ 5.6 cm、幅 4.4 cm、内径は 1.5 cm を測る。

(3) 青磁 (図版 3 16・17)

S K 56 から 3 点、遺物包含層から 13 点、合計 16 点出土した。図化したものは遺物包含層から出土した残りのよいもの 2 点である。

16 は蓮弁文を施す碗、17 は底部に渦巻文を施す碗である。

(4) 珠洲焼 (第 5・6 図 18 ~ 34)

珠洲焼は吉岡康暢氏の編年における II ~ V 期に比定される。

S K 04 出土

18・19 は甕である。頸部で若干くびれて口縁部を屈曲させる。

S K 12 出土

20 は擂鉢である。体部は内彎気味にのび、口縁端部を内傾させる。

S K 53 出土

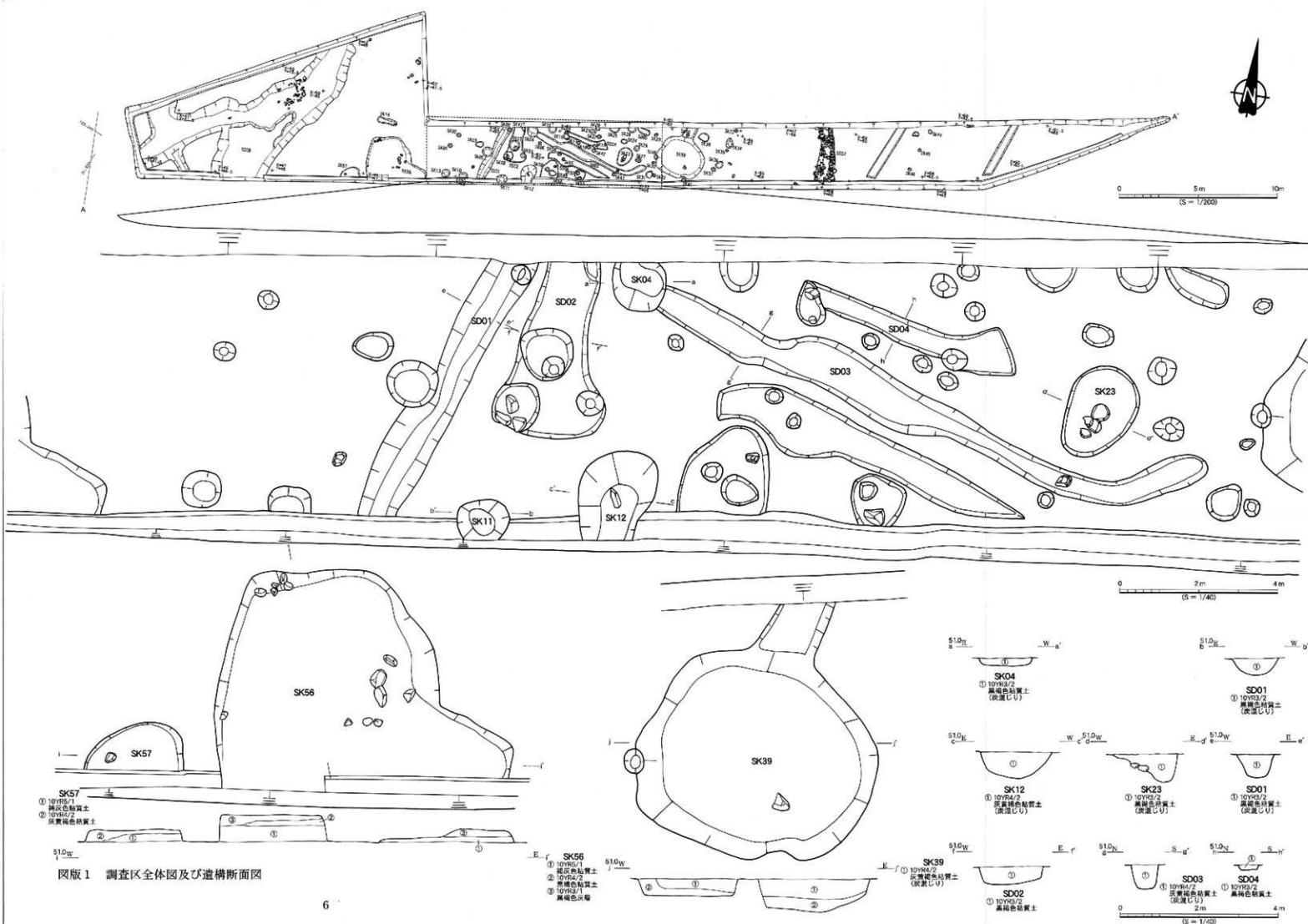
21・22 は甕である。頸部で強く内屈させ、口縁端部は水平となる。

S K 56 出土

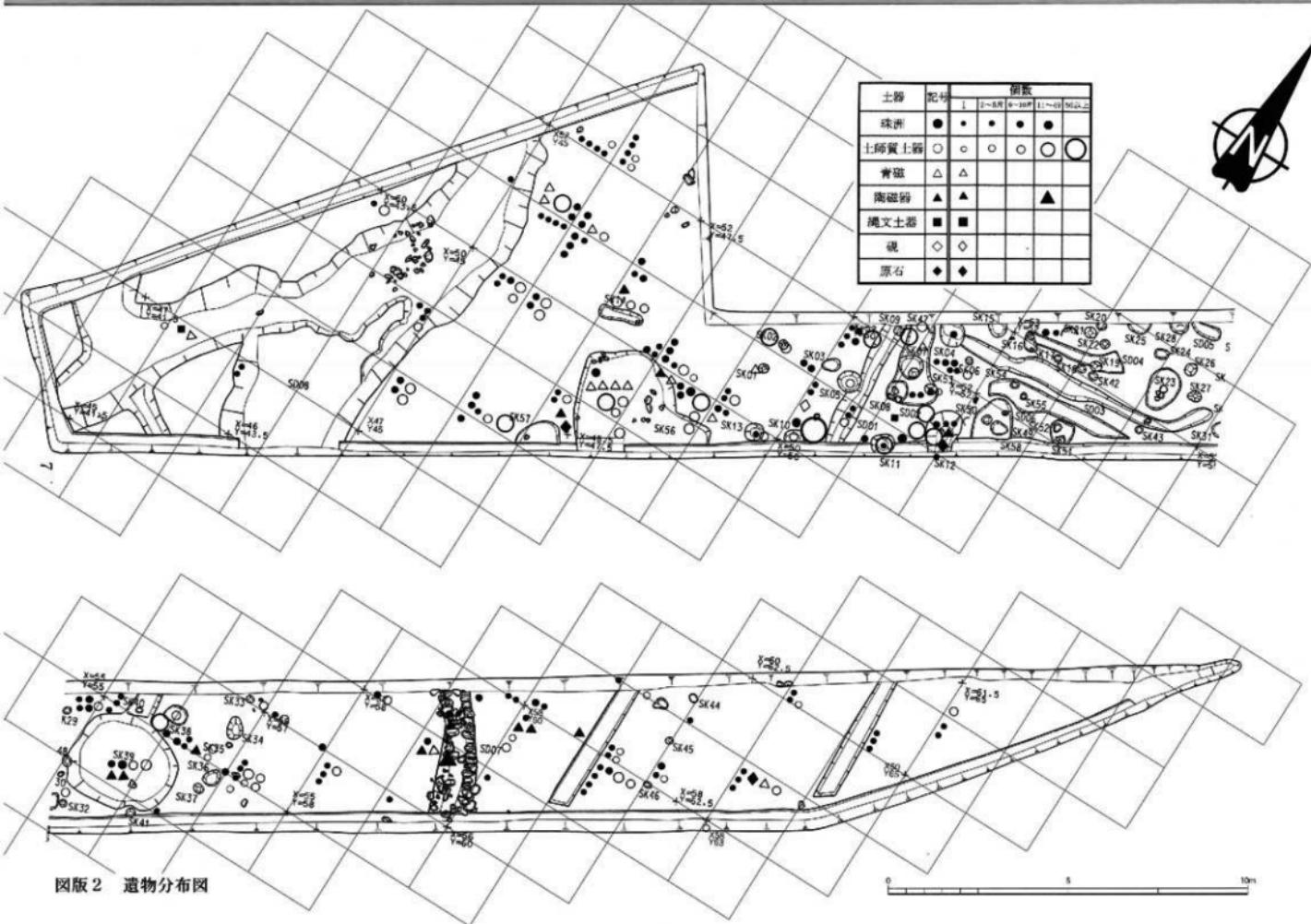
23・24 は擂鉢である。23 は体部が直線的にのび、口縁端部を水平に面取りする。25 は壺である。口縁部は直立し、端部は方頭状となる。口縁端部と体部上面に櫛目波状文を施す。26・27 は甕である。頸部でゆるやかに屈曲し、口縁部は外傾しながら直線的にのびる。

遺物包含層出土

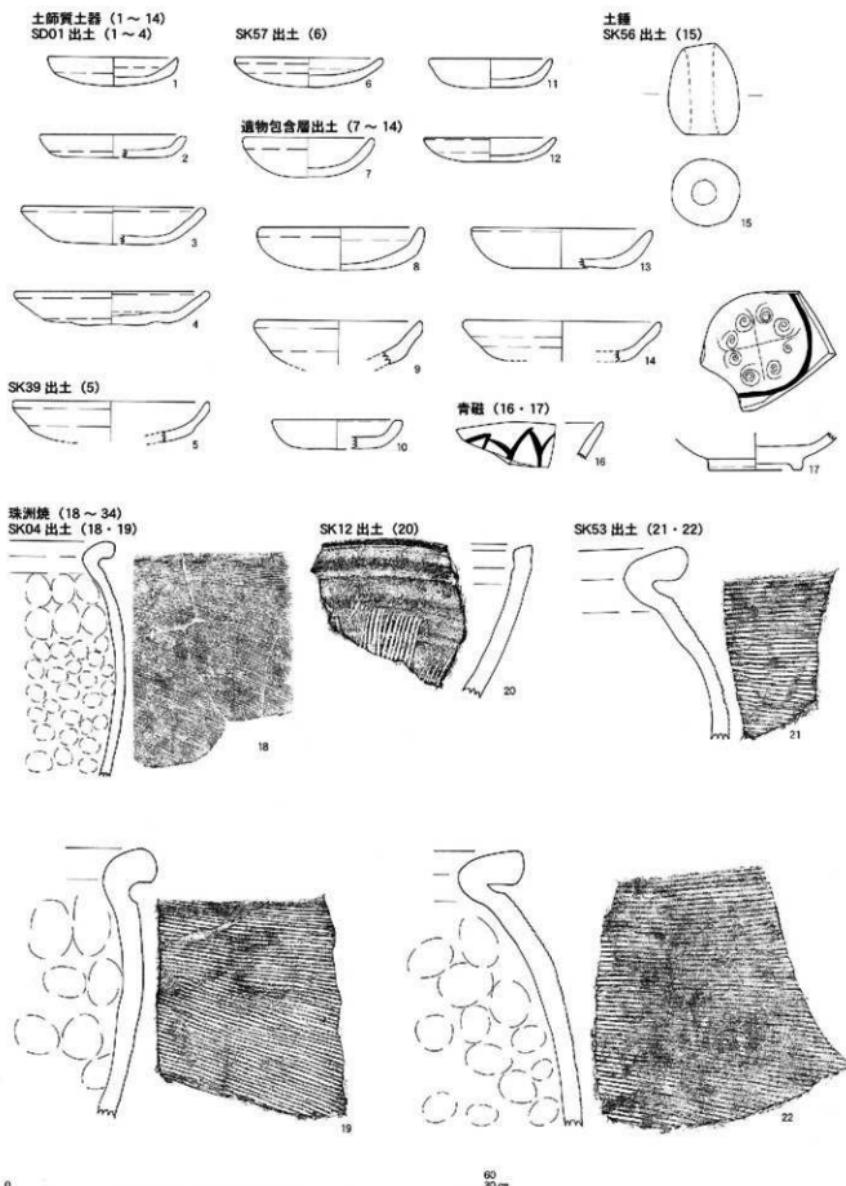
28・29・34 は擂鉢である。28 は口縁部が水平で、端部を丸くおさめる。29 は口縁端部が方頭状を呈し、外傾する。30 は壺である。外傾しながら長頸がのび、口縁端部は肥厚する。31 ~ 33 は甕である。31 は頸部でゆるやかに屈曲し、短い口縁部がつく。32 は頸部で強く屈曲し、口縁端部は水平となる。33 は、外傾しながら口縁部がのびる。



土器	記号	個数		
		1~5件	6~10件	11~50件
珠	●	●	●	●
土師質土器	○	○	○	○
青磁	△	△		
陶磁器	▲	▲		▲
縄文土器	■	■		
鏡	◇	◇		
原石	◆	◆		

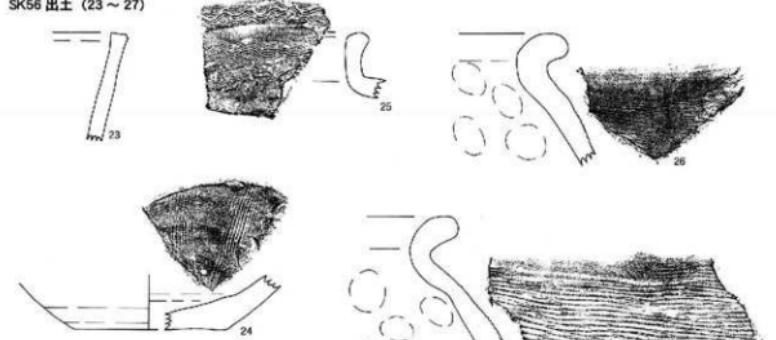


図版2 遺物分布図

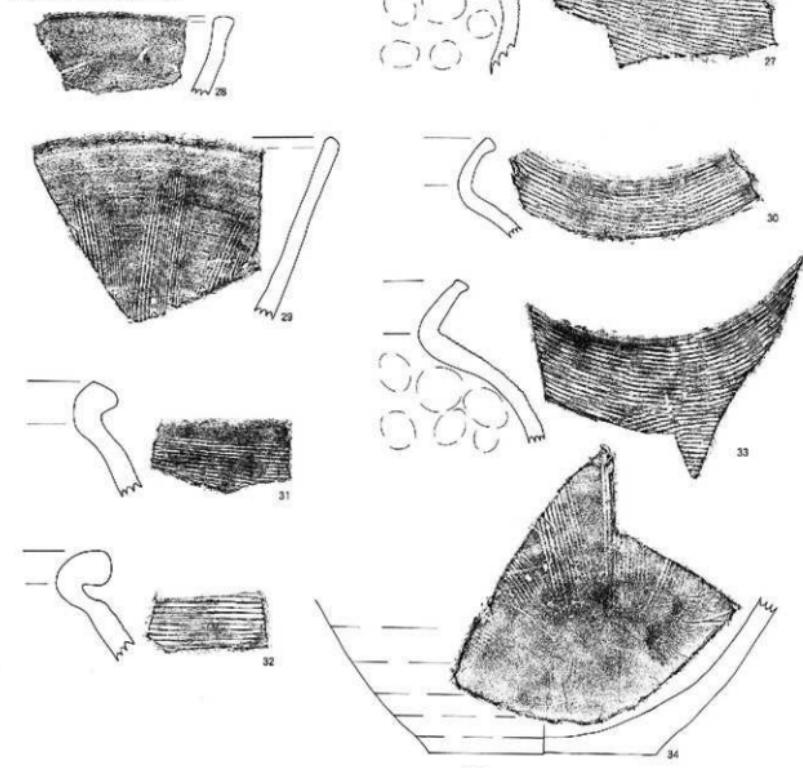


図版3 出土遺物実測図 (18のみ S = 1/6、その他 S = 1/3)

SK56 出土 (23 ~ 27)



遺物包含層出土 (28 ~ 34)



図版 4 出土遺物実測図 (S = 1/3)

IVまとめ

今回の調査区竹ノ内Ⅱ遺跡の時代区分は出土遺物等から考察して、平成13年度に調査された今回の調査区から南側に位置する同遺跡（富山県文化振興財団調査）の調査結果同様「中世」と考えられる。遺構の分布状態からみて遺跡全体は今回調査区から南北へさらに拡がることが推定される。

調査区東側は昭和38年当時に行われた大規模な圃場整備による消失が確認されたが、西側には旧河川跡、中央部からは土坑58基、溝8条の遺構群が集中して発見された。（図版1 調査区全体図参照）

遺物も遺構同様西側から中央部にかけてSK・SD内での集中出土を含め、全体に散布が認められた。総数木箱20箱を数え、主として土師質土器（皿）・珠洲（甕・壺・擂鉢）・青磁（碗）があげられる。

中央部の遺構・遺物集中区は旧河川跡に隣接することからも住居跡の可能性は推測できるが、今回の調査範囲が南北に4mと極端に狭いため、土坑の並びに住居跡の規則性を確認するまでには至らなかった。ただ、人々の居住区域であった可能性は充分に考えられる。

また、旧河川跡の底部にいくつかの土坑が確認されたことや、調査区広域に亘り焼土や炭が確認されている事などから、当時の居住区域が河川の氾濫により一部流失したり、何らかの原因で一帯が焼失した可能性は窺える。

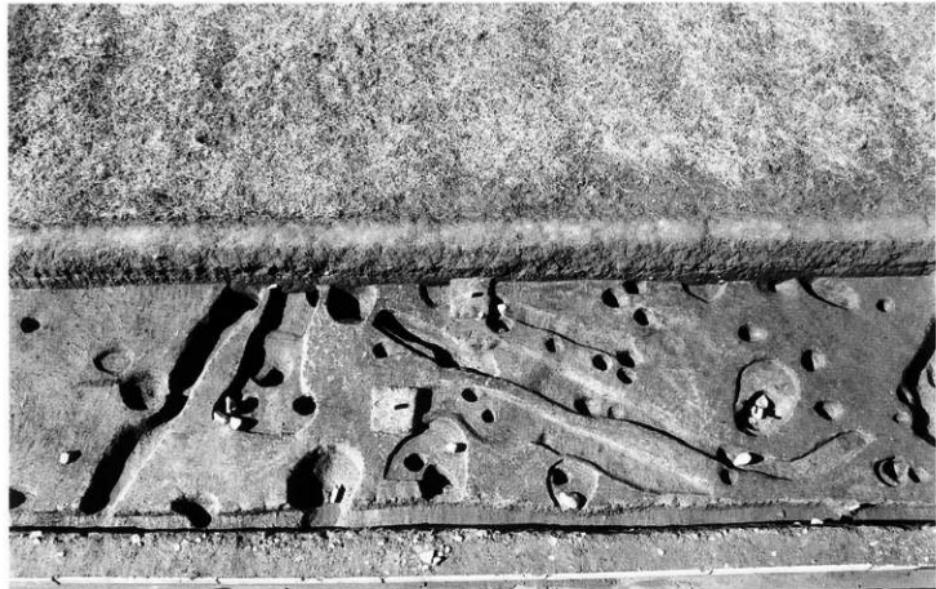
これらのことから当遺跡は、当時の人々の生活状況の過酷さが自然環境を通して伝わる遺跡であるということがわかる。

参考文献

- 竹内俊一 1998 『両越国境 朝日町の山城—今よみがえる歴史の里』 朝日町中央公民館
宮田進一 1992 「越中における中世土器の編年」『中世前期の土器・陶磁器・漆器』
北陸中世土器研究会
吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
吉岡康暢 1989 『珠洲の名陶』 珠洲市立珠洲焼資料館
朝日町 1984 『朝日町誌 歴史編』『自然編』
朝日町教育委員会 2003 『柳田遺跡発掘調査報告書』
財團法人 富山県文化振興財団 2002 『埋蔵文化財調査概要 平成13年度』
財團法人 富山県文化振興財団 1996 『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』
北陸中世土器研究会 1997 『中近世の北陸』 桂書房
富山県立図書館 富山県郷土史会 1982 『郷土の文化』
入善町教育委員会 1985 『じょうべのま遺跡－C・K地区の調査－』
下新川郡役所 1972 『下新川郡史稿 上巻』『下巻』
福岡町教育委員会 2002 『木船城跡発掘調査報告－範囲確認調査報告－』



調査区全景

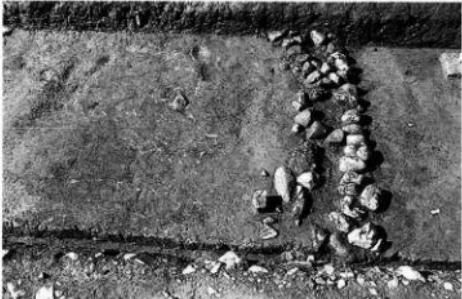


土師質土器集中出土地区

遺構



旧河川跡



SD07



SK39



SK57



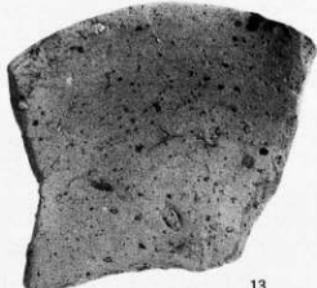
SD02 遺物出土状況



SD02



SK04 遺物出土状況



13



11



4



6



9



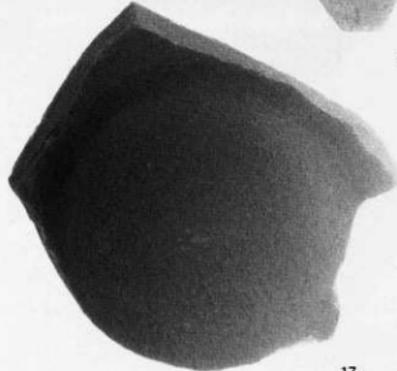
10



3



16



17

土師質土器・青磁 (S = 1/1)



2



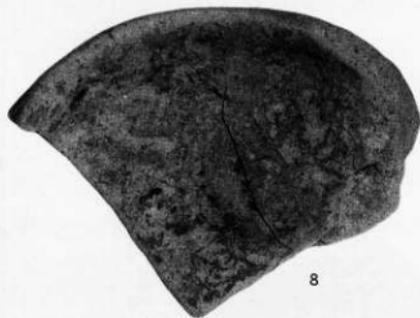
14



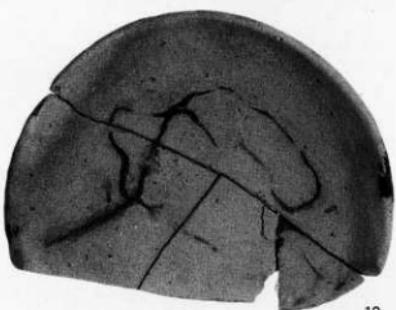
1



7



8



12



5



15

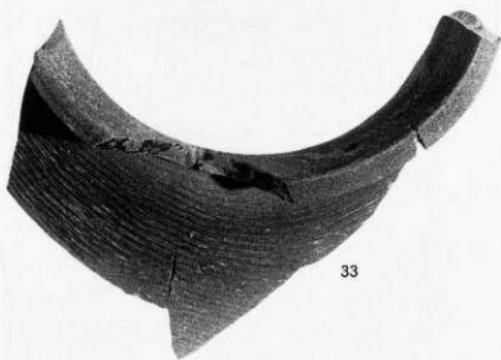
土師質土器・土錘 (S = 1/1)



27



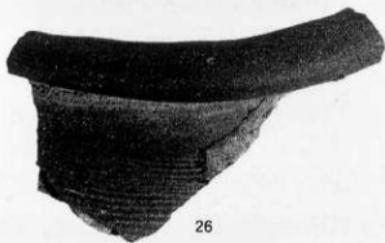
21



33



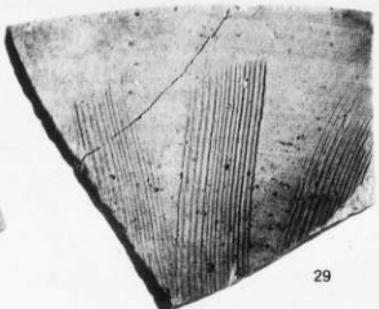
30



26



34



29

珠洲 ($S = 1/2$)



28



25



32



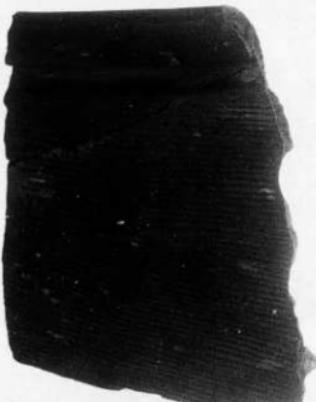
31



24



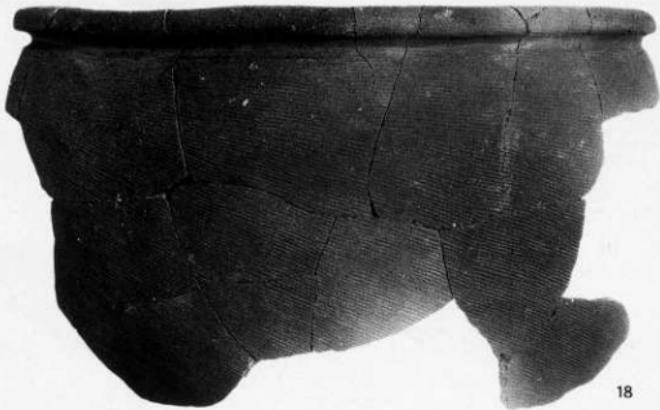
23



19



22



18

珠洲 ($S = 1/2$ 18 のみ $S = 1/4$)

報告書抄録

ふりがな	とやまけんあさひまち たけのうちⅡいせきはつくつちょうさほうこくしょ						
書名	富山県朝日町 竹ノ内Ⅱ遺跡発掘調査報告書						
副書名	新川中部地区県営農免農道整備事業に伴う発掘調査報告書						
卷次	(1)						
シリーズ名	朝日町発掘調査報告書						
シリーズ番号	第8集						
編著者名	財団法人朝日町文化・体育振興公社 文化財保護主事 包坂友秋 財団法人朝日町文化・体育振興公社 文化財保護主事 島 瑞穂						
編集機関	朝日町教育委員会						
所在地	〒富山県下新川郡朝日町道下 1133 TEL 0765-83-1100						
発行年月日	西暦 2005年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 。 。 "	東経 。 。 "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
竹ノ内 Ⅱ遺跡	富山県下新川郡 朝日町高畠143-1 144-5	16343	343087	36° 55' 54"	137° 34' 40"	040811 ~ 041008	県営農免 農道整備 事業に係 る事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
竹ノ内 Ⅱ遺跡	道路	中世	上坑・溝・旧河川跡	土師質土器・珠洲 青磁・陶磁器			
要約	<p>今回の調査区の時代区分は出土遺物等から、平成13年度に調査された調査区南側竹ノ内Ⅱ遺跡（富山県文化振興財団調査）の調査結果同様「中世」と考えられる。</p> <p>調査区東側は大規模な圃場整備により消失していたが、西側から中央部にかけては遺構の依存が確認された。遺跡全体は南北調査区外へ広がることが推定される。</p> <p>遺跡中央部分は上坑・溝跡が集中して確認された。同時に遺構内を含め、集中区ほぼ全体に珠洲・土師質土器・青磁等の土器の散布が認められた。</p> <p>集中区は調査区西側川河川跡の隣接に位置することからも住居跡等の可能性は考えられるが、今回の調査範囲は南北が4mと極端に狭いため土坑の並びに規則性をみる事ができなかったため、断定はできない。</p> <p>調査区東側から中央部分に關しては、焼土や炭が広範囲で確認されており、何らかの原因で一帯が焼けた可能性も窺える。</p> <p>上記より、この範囲は明確な住居区の確認には至らなかったが、人々の生活区域に人ることは充分考えられるであろう。</p>						

平成17年3月発行

富山県朝日町 竹ノ内Ⅱ遺跡 発掘調査報告書

編集 朝日町教育委員会
発行 朝日町教育委員会
富山県下新川郡朝日町道下 1133
印刷 有限会社 向越印刷

